

〈訳注研究〉

蔵訳『阿闍世王経』第三章前半部分訳注研究

宮 崎 展 昌

はじめに

本稿は、先年来公表してきた蔵訳『阿闍世王経』の訳注研究（第二章：拙稿 [2017]、第四章：拙稿 [2018a]、第XI章前半：拙稿 [2018b]）に連なるものであり、同経第三章前半部分について扱う。¹これまで同様、同経の現存する蔵訳の暫定的な批判校訂本にもとづく訳注研究である。

本稿で扱う第三章については、〈阿闍世王経〉(**Ajātaśatrukaukṛtya (prati-)vinodana*) の主要部分である第V章から第X章より前の部分、いわゆる「序分」の一部に相当する。²第三章にみられる、同経の他の部分とは明確な差異として、同章に相当する独立単行經典の失訳『放鉢経』(T. No. 629) が伝存する点が挙げられる。この独立単行經典は漢訳經典の1種類しか現存しないものの、鳩摩羅什訳『大智度論』では『放鉢経』の名のもとに引用される用例も数例確認され、³単行經典として実際に流布していた様が窺える。

そのような独立単行經典の『放鉢経』が現存することにより、それに相当す

1 既発の訳注研究でも注記したように、訳者は現在〈阿闍世王経〉全体にわたる蔵訳の批判校訂本とそれにもとづく訳注研究および諸訳対照本の公表にむけて準備している。それに先行して、同経各部分について、蔵訳からの訳注研究を試みに提示し、諸先学の御批正を仰ぎたい。

2 〈阿闍世王経〉全体の構成・梗概については、拙著 [2012: 32ff] 参照のこと。章分けについては、拙著 [2012] や前稿同様、竺法護訳『普超三昧経』にみられる分目を借用する。一方、支識訳『阿闍世王経』を現代語訳した定方 [1989] では、章は設けずに、定方氏による独自の分節がなされている。本稿で扱う第四章は同書では第11節に相当する。

3 拙著 [2012: 21-22] 参照。なお、そこでも触れたように、『大智度論』での引用文は現存する漢訳『放鉢経』とも異なり、同経や〈阿闍世王経〉諸本とも一致しない文言も含むことが確認されている。

る〈阿闍世王経〉第Ⅲ章にまつわる編纂事情としては、元来は独立していた典籍あるいは素材が〈阿闍世王経〉の一部に取り込まれたものと推測することができる。ちなみに『放鉢経』には、〈阿闍世王経〉第Ⅲ章にはみられない、サハー（娑婆）世界に関する比較的長い独自の記述（T. No. 629 15.450a13-b25）などを含むことから、〈阿闍世王経〉第Ⅲ章と『放鉢経』の間ではもともとは素材が共有されていたものの、独自の伝承過程を経た『放鉢経』では新たな記述が付加され、現在のかたちになったとみることができる。

独立単行經典の『放鉢経』という経題、また、竺法護訳での「放鉢品」というタイトルからもわかるように、〈阿闍世王経〉第Ⅲ章では、釈尊によって放り投げられ、下方の他仏国土にまで落ちていった鉢をめぐって、三昧に入った文殊がその鉢を取ってくる様が描かれる。さらに、その文殊と関連して、釈尊と文殊の前生譚が説かれるというのが梗概になっている。本稿で扱うのは、文殊の右手が、鉢が落ちていった下方世界に到達する様が描かれる第11節までである。なお、第12節以降の部分についても近く訳注研究を公表できるように準備を進めている。

ちなみに、本稿で扱う〈阿闍世王経〉第Ⅲ章については、Harrison [2004] として、蔵訳からの堅実な英訳が既に公表されている。ただし、同書では一般向け書籍という性格からか注が省かれ、本稿において注釈付きの和訳研究を公表する意義は一定程度確保できるものと信じる。

訳注の方針

本稿でもこれまでの方針を基本的に踏襲するが、便宜上ここでも再掲しておく。

前稿同様、本稿でも〈阿闍世王経〉の蔵訳テキストからの現代語訳を提示する。依拠する蔵訳テキストは筆者が現在準備を進めている、暫定的な批判校訂本⁴とし、用いた蔵訳資料の間に重大な異読がみられた場合は注記する。言うまでもなく、同経の蔵訳テキストは翻訳文献であるので、そのもとになったであろうサンスクリット語文を可能な限り想定することを試みる。以下、その他の

4 現時点では、後出の略号表に掲げる16種の資料を用いて、蔵訳〈阿闍世王経〉の批判校訂本を準備している。校訂本の作成にあたっては便宜的にロンドン写本カンギュルを底本とする。

点について箇条書きで記す。

- 【分節】 訳者の判断にもとづいて、前後で話題や場面が切り替わるとみられる箇所では節に区切り、適当な見出しを付ける。
- 【想定梵語】 原則的にアステリスクを付して記す。ただし、紙数の関係から、単語レベルのものは訳文中の括弧内に想定サンスクリット語を記すのみとし、その典拠は割愛する。漢訳諸本における、相当する漢訳語も併記したほうがよい場合などはその典拠もあわせて注記する。
- 【固有名】 紙数の関係から、本稿では想定梵語からのカタカナ表記は初出時に示すのみとし、繰り返される場合は相当する漢訳語を借用するか一般に知られる漢訳の固有名を用いることにする。
- 相当する現存漢訳諸本、特に支識訳および竺法護訳と蔵訳との間に注目すべき異同が見られる場合は重点的に注記する。早くとも9世紀頃に成立した蔵訳本に比べてかなり古く、系統を異にするとみられる上記両漢訳は、同経のより古い姿を探る上で貴重であり、それらの異同を詳細に調査し、記すことは極めて重要である。

略号および使用テキスト

- Divy *The Divyāvadāna: A Collection of Early Buddhist Legends*,
E. B. Cowell & R. A. Neil eds., 1886. (Reprint: Amsterdam, 1970)
- DKP *Druma-kinnara-rāja-ṣaṣṭhā-sūtra: A Critical Edition of the
Tibetan Text (Recension A) Based on Eight Editions of the Kanjur
and the Dunhuang Manuscript Fragment*, Paul Harrison, ed., 1992.
- Gv *Gaṇḍhavyūha*, P. L. Vaidya ed., 1960.
- LCTSD Lokesh Chandra ed., *Tibetan-Sanskrit Dictionary*, 1959-1961
(Reprint: Kyoto, 1976)
- MVy *Mahāvīyūtpatti*, 榊亮三郎編著『梵蔵漢和四譯對校繙譯名義大集』
1916-1925. (Reprint: 国書刊行会、1981)
- PvP *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā*, Nalinaksha Dutt ed.,
1934. (Reprint: Calcutta, 2000)
- Skt.fr. Harrison and Hartmann [2000]

- SP *Saddharmapuṇḍarīka*, Kern, H & Bunyiu Nanjio eds., 1912.
 T. 大正新修大蔵経
 VkN *Vimalakīrtinirdeśa*, 大正大学総合仏教研究所梵語仏典研究会編『梵文維摩経—ボタラ宮所蔵写本に基づく校訂』大正大学出版会、2006

蔵訳〈阿闍世王経〉諸本⁵

- | | | |
|-----|----------------------|--|
| A | タボ (Tabo) 寺写本 | No. 1.4.15.1 (Running No. 26); Ke 32, 45, 47, 50-51, 53, 61, 61-75, 77-79b2. |
| B | ベルリン写本 | No. 224: mdo sde, Tsha 275b5-343a2. |
| Ba | バスゴ (Basgo) 写本 | No. 49.2: Mdo, Nga 76a2-160b4. |
| Bth | バタン (Bathang) 写本 | No. 57: Pa 150a6-199b1. |
| D | デルゲ版 | No. 216: mdo sde, Tsha 211b2-268b7. |
| G | ゴンドラ (Gondhla) 写本 | No. 26,01: Kalb-51a5. |
| He | ヘーミス (Hemis) 写本 (Ⅰ) | No. 48.1: mdo, Nga 133-157a6. (第X章の途中より) |
| Hi | ヘーミス (Hemis) 写本 (Ⅱ) | mdo, Nga 77-81, 91-92, 95, 100, 114-118, 148-152a1. |
| J | ジャンサタン (リタン) 版 | No. 159: mdo sde, Tsha 234b2-295a6. |
| L | ロンドン写本 | No. 166: mdo sde, Za 273a7-354a6. |
| N | ナルタン版 | No. 201: mdo sde, Ma 339a4-427b6. |
| P | 大谷北京版 | No. 882: mdo sna tshogs, Tsu 220a5-281a5. |
| Ph | プクタク (Phug brag) 写本 | No. 289: mdo sde, Ke 1b1-85b3. |
| S | トク宮 (Stog Palace) 写本 | No. 223: mdo sde, Za 266b7-351a7. |
| T | 東京写本 | No. 223: mdo sde, Za 247a8-321a8. |
| U | ウランバートル写本 | No. 272: mdo sde, Za 237b4-312b8. |

5 チベット大蔵経カングル諸本の〈阿闍世王経〉の情報については、ウィーン大学 Department of South Asian, Tibetan and Buddhist Studies に置かれたプロジェクト The Tibetan Manuscripts Project Vienna (TMPV) が作成したデータベース The Resources for Kanjur & Tanjur Studies (rKTs; <https://www.istb.univie.ac.at/kanjur/rktsneu/sub/index.php>: 2018年8月28日確認) を利用した。

〈阿闍世王經〉漢訳諸本

【識】 支婁迦讖訳『阿闍世王經』（大正新修大藏經 No. 626）

【護】 竺法護訳『普超三昧經』（大正新修大藏經 No. 627）

【天】 法天訳『未曾有正法經』（大正新修大藏經 No. 628）

【放】 失訳『放鉢經』（大正新修大藏經 No. 629）

参考文献

- Harrison, Paul [2004] “How the Buddha become a *Bodhisattva*,” *Buddhist Scripture*, Penguin Books, London, pp. 172-184.
- Harrison P. and Hartmann J. U. [2000] “*Ajātaśatrukaukṛtyavinodanāsūtra*,” *Buddhist Manuscripts I, Manuscripts in the Schøyen Collection*, Vol. I, Hermes Academic Pub., Oslo, pp. 167-216.
- Otake, Susumu [2007] “On the Origin and Early Development of the *Buddhāvataṃsaka-sūtra*,” *Reflecting Mirrors: Perspectives on Huayan Buddhism*, Harrassowitz Verlag, pp. 87-107.
- Miyazaki, Tensho [2016] “Highly Effective Practices in the *Sahā* World: Similar Accounts Found in Four “*Manjūsri Sūtras*” and Other Mahāyāna Sūtras,” *Journal of Indian and Buddhist Studies*, 64-3, pp. 1171-1177.
- 梶山雄一 [1995] 「神変」梶山 [2012 : 237-285 (第10章)] (初出 : 『佛教大学総合研究所 紀要』第2号)
- 梶山雄一 [2012] 『神変と仏陀観・宇宙論』(梶山雄一著作集 第3巻) 春秋社、東京。
- 梶山雄一・丹治昭義訳 [1994] 『さとりの遍歴—華嚴經入法界品』(上下2巻) 中央公論社、東京。
- 定方 晟 [1989] 『阿闍世のさとりの一仏と文殊の空のおしえ』人文書院、東京。
- 高橋尚夫・西野翠訳 [2011] 『梵文和訳 維摩經』春秋社、東京。
- 平岡 聡 [2007] 『ブッダが謎解く三世の物語—『ディヴィヤ・アヴァダーナ』全訳』(上下2巻) 大蔵出版、東京。
- 星 泉 [2016] 『古典チベット語文法—『王統明鏡史』(14世紀)に基づいて』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京。
- 松濤誠廉他訳 [2001] 『法華經2』(中公文庫・大乘仏典5)、中央公論新社、東京。

宮崎展昌 [2012]『阿闍世王経の研究—その編集過程の解明を中心として』山喜房佛書林、東京。

[2017]「藏訳『阿闍世王経』第Ⅱ章訳注研究」『真宗総合研究所研究紀要』第34号、pp. 77-97。

[2018a]「藏訳『阿闍世王経』第Ⅳ章訳注研究」『大谷学報』97-2、pp. 83-103。

[2018b]「藏訳『阿闍世王経』第Ⅵ章前半部分訳注研究」『真宗総合研究所研究紀要』第35号、pp. 163-183。

村上真完校註 [1994]「阿闍世王経」『阿闍世王経・文殊師利問経他』（新国訳大藏経 9、文殊経典部 1）pp. 36-89、249-350。

（本研究は JSPS 科研費 JP16K16694 の助成を受けたものである。）

【蔵訳『阿闍世王経』第Ⅲ章前半部分訳注】

第Ⅲ章 鉢をめぐる奇蹟と文殊・釈尊の前身⁶§1 退転しそうな二百の天子たち⁷

その会座のうち、過去の行をそなえた天子で、さとりに心を失った二百の〔天子ら〕は次のように考えた。すなわち、

「仏の法もまたそのように無量であり、菩薩の学すべきこともまたそのように実に習得しがたく、無上正等覚もまたそのように成し遂げがたいものであるならば、私たちはこの学すべきことを習得することはできないので、私たちは声聞乗あるいは独覺乗によって般涅槃すべきである」

6 【護】「拳鉢品第三」、定方〔1989：45〕「第8節 仏鉢の奇蹟」なお、【放】では、經典の冒頭部分（T. No. 629 15.449a27-b3）において、舎衛城の祇園精舎において、仏が菩薩や比丘・比丘尼、優婆塞・優婆夷に対し、菩薩法は、地獄や畜生道、餓鬼道における辛い苦しみ（勤苦）を耐え、財産のみならず「妻子、頭目、肌肉」といったものまでも惜しまずに布施することを説く様が描かれる。そして、それらを聞いた「忉利天上二百天子」が退転しそうになるという展開になっている。ちなみに、〈阿闍世王経〉諸本では釈尊の会座は王舎城の近くという設定になっている。

7 本経の第Ⅲ章同様、無上正等覚は得難いから声聞あるいは辟支仏になろうとする「退転しそうな二百の天子」が登場する大乘經典として、〈首楞嚴三昧経〉（T. No. 642 15.642a26ff; D No. 132 mdo sde, Da 300b6ff）を挙げることができる。同経では、首楞嚴三昧のもたらす不可思議なる功德のひとつとして、文殊が過去世に辟支仏として涅槃に入ることを繰り返していたことが明かされる。また、阿羅漢や辟支仏は首楞嚴三昧に堪えられる「器」ではないことなどが示され、最終的には、退転しそうな二百の天子は再び無上正等覚へと発心する。両経の間で、無上正等覚を獲得することを諦めて、声聞あるいは辟支仏へと「退転しそうな二百の天子」が、最終的には改心して、再び無上正等覚へと発心するという枠組みが共通する。その他の共通点としては、文殊の前身譚が説かれることが挙げられるが、その内容は大きく異なる。

8 蔵訳では明白に「さとりに心を失った（*byang chub kyi sems rab tu stor ba*）」とされているが、【天】をのぞいた諸漢訳には下記のように「堅固ではない」という文言が確認できる。

【識】「未堅固皆欲墮落」【護】「志不堅固」【放】「未堅」

なお、【護】では「忘道意」という蔵訳に近い文言も見られる。

9 【護】では「天子千二百人」とし、【天】では「忉利天上二百天子」と造る。

と考えた。

§2 世尊によって化作された長者と供物の献上

そこで、彼ら天子たちの心の妄分別は、世尊の^{みこころ}御心によって知られ、

「ああ、この天子たちは無上正等覚を悟る分をそなえている¹⁰」

と考えて、彼ら天子たちの教化のために、会座の外に、あるひとりの家長（*grhapati）を化作すると、その家長は百の味をそなえた食物で満たされた鉢（*pātra）を右手に携えていた。

そこで、その家長は世尊のところへやって来て、世尊の足へ頭でもって敬礼して、食物で満たされたその〔鉢〕を世尊に献上すると、

「世尊よ、私を憐れんで（*anukampām upādāya）、この供物をお召し上がりください」

とそのように言うと、世尊は食物で満たされたその鉢を受け取られた。

§3 舍利弗の疑念

そこで、文殊師利法王子は座より立って、上衣を一方の肩にかける（＝偏袒右肩）と（*ekāṃsam uttarasamgam kṛtvā）、合掌して、世尊に対して次のように申し述べた。

「世尊よ、この供物より私へと下賜せずにお召し上がりになるならば、世尊よ、〔あなたは〕恩義を知るもの（*kṛtajña）でなくなってしまうでしょう¹²」

10 先の注8と関連するように、藏訳では上記のような心中の言葉になっているが、諸漢訳のうち、【識】と【護】では前節の内容を受けて「天子たちが退転しそうになっている」と釈尊が考えるという記述になっているが、【天】では天子たちに直接「退転してはいけない」と語りかける記述になっている。【放】では単に天子たちが退転しそうになっているのを知るとする。

11 文殊とともに用いられる kumārabhūta という称号については、拙稿[2017: 83, 注8] 参照のこと。前稿同様、便宜的に「法王子」と訳出する。

12 この箇所についても藏訳と諸漢訳との差異が大きいので、以下に漢訳諸本を掲げて現代語訳を試みる。

【識】「雖食、当念故恩」（たとえ〔世尊は供物を〕食したしても、かつての恩を思い出すべきである（思い出すであろう））

そこで、長老舍利弗は次のように考えた。

「ああ、文殊師利法王子は、かつて、世尊に対してどのような恩恵を与えたならば、それゆえに、〔世尊を〕恩義知らずのものとして非難する¹³のか」

【護】「今食盛饍当念感恩。吾誠信聞。大聖雖食而不以法惠及於鄙，惟宜加施以法相惠剋復往意」（今〔世尊が〕もられた供物を食べるならば、かつての恩を思い出すべきである。私は誠実に信じ聞きます。大聖よ、〔施食を〕食したとしても、法で貧しいものに恵むことをしない。法でもって施しを加え、お互いに恵みあい、意を向けることを回復するべきである）

【天】「世尊！仏所受食無有限量，応遍法界，而無所著。無施者無受者，皆平等如法受食」（世尊よ、仏が受けたところの食事は限りがなく、法界を遍満することができても、執着されるものない。施すものなく、受けるものもなく、すべて平等であり、法のとおり食事を受け取る）

【放】「常念感恩」（常に昔の恩を思う〔べし〕）

【識】と【放】は類似し、かなり簡潔なかたちを示す。【護】も「吾誠信聞」より前は【識】および【放】に対応するものの、それ以降の下線部は他訳とは対応せず、やや難解な文言が確認できる。それらは訳者によって付加された補足的な説明と推測できる。一方、【天】はいずれの他本とも対応しない。いずれにしても、上記蔵訳のような言い回しは漢訳諸本には見られず、特有のものである。

13 ここでも蔵訳は漢訳諸本とは相違する。先の箇所同様、漢訳諸本を引用し、現代語訳を試みる。

【識】「舍利弗心念：“仏本作何等而文殊師利言‘当念感恩’乎？”則問仏：“文殊師利本有何功德，而置怛薩阿竭？”」（舍利弗は心中思った「仏はかつて（前世で）何をなして、文殊は『かつての恩を思い出すべきである』と言ったのか？」そこで〔舍利弗は〕仏に尋ねた「文殊はかつて（前世で）どんな功德を持っていて、如来を許しているのですか」）

【護】「舍利弗心自念言：“軟首往古有何恩德，於世尊所而言‘雖食，顧前法恩。’”則白仏言：“軟首童真宿有何恩於大聖乎？而置如来雖当食者念前法恩”」（舍利弗は心中で思ってしまった。「文殊はかつてどんな恩德をなしたから、世尊の前で『食べたとしても、かつての法恩を思い出さない』と言うのか」そして〔舍利弗は〕仏に言った「文殊は大聖に対して前世でどういった恩があったのか？如来を許し、『食べるべきでも、かつての法恩を思い出さない』と言ったのか」）

【天】「爾時舍利子心生疑念：“施食長者従何所来？豈非妙吉祥菩薩所化而作仏事？”」（そのとき、舍利弗は心の中で疑念を生じた「食事を施した家長はどこからやってきたのか。どうして文殊菩薩に化作されたものが仏に仕えることをなしたものでないことがあろうか」）

と考えた。そこで、世尊は長老舍利弗の考えをお知りになると、長老舍利弗に対して次のようにおっしゃった。

「舍利弗よ、如来は時機をご存知である。¹⁴すなわち、あなたにお説きになるので待ちなさい」

§4 下方世界へと墮ちる鉢

そこで、世尊によってその鉢は大地の中へと放擲されると、放擲されて間もなく、下方の仏国土それぞれにおいて、仏・世尊としておられ、とどまれ、日を送りされているところの、彼ら正等覚者の眼前をその鉢は過ぎた。そして、その鉢は下方の、ガンガーの川岸の砂ほどの仏国土¹⁶を超えて、アヴァバーサ(遍照)¹⁷という世界において、如来・阿羅漢・正等覚者で、ラシュミラージャ(光明王)¹⁸というものがおられるところの、その仏国土において、その鉢は持たれることなく中空にとどまっていた。彼ら仏・世尊に対しても、各々の随侍するものたち(*paryupāsana)が、

「世尊よ、この鉢はどこからやってきたのか」

【放】「座中諸菩薩悉聞，展轉相問：“文殊師利前世有何等恩？施於仏而復欲得仏飯？”」（会座の中の菩薩たちは皆聞いて、お互い尋ねあった。「文殊は〔世尊に対して〕前世でいかなる恩があるのか？仏への施しであるのに、仏の飯を得ることを欲しているのか？」）

【識】と【護】では舍利弗の心中の言葉と釈尊への問いかけが別々の形になっており、後続の釈尊の発言も舍利弗の質問を受けたものとなっている。これは両者の系統が近いことを反映したものと推察できる。【放】については全く異なるものとなっている。

14 藏訳にみられる「時機を知る」という文言は、諸漢訳の中で【天】のみ「若来若去 仏自知時」とするのが対応するが、他の漢訳には対応する文言は見られない。

15 *bzhugs pa 'tsho ba gzhes pa'i*: *tiṣṭhati dhriyate yāpayati (おられ、とどまり、日を送りされている) (MVy 6319-6321)

16 *gang gA'i klung gi bye ma snyed*: *gaṅgānadivālukāsama (LCTSD 339) 藏訳では訳出したとおり、単に「ガンガーの川岸の砂ほど(恒河沙)」とするが、【護】「七十二恒河沙」のように、【放】をのぞく諸漢訳では「七十二」という数字が見える。

17 *snang ba dang ldan pa*: *Avabhāsa. 【識】「漚呵沙(漚呵沙者天竺語漢言名曰明開闢)」【護】「焰燿」【天】「光明」【放】「波陀沙」

18 ① *'od zer gyi rgyal po*: *Raśmirāja. 【識】「荼毘羅耶(漢曰光明王)」【護】「光明王」【天】「光明王」【放】「賴毘羅耶」

と尋ねると、彼ら仏・世尊もまた、

「上方にあるサハー（娑婆）という世界より、世尊・如来・阿羅漢・正等覺者であるシャーキャムニ（釈迦牟尼）の御前よりやって来た。すなわち、〔退転しそうな〕他の菩薩たちを教化するために放擲されたものである」¹⁹と言った。

§5 舍利弗が三昧に入り、鉢を探す²⁰

そこで、〔釈迦牟尼〕世尊は長老舍利弗におっしゃった。

「舍利弗よ、その鉢を〔地中より〕取り出しなさい。いずこかにとどまるそれをも探しなさい」

そこで、長老舍利弗は万の三昧に入って、自らの智慧の力と仏の威神力によって、万の仏国土をも探しても、その鉢の在処²¹、あるいは場所^{ありか}も分からず、彼は再び世尊の前に座った。座ってから〔舍利弗は〕世尊に次のように申し述べた。

「世尊よ、私にはその鉢の在処、あるいは場所も分かりません」

§6 目犍連が三昧に入り、鉢を探す

そこで、世尊は長老目犍連に次のようにおっしゃった。

「目犍連よ、あなたはその鉢を探しなさい」

そこで、長老目犍連は万の三昧に入って、仏の威神力と自らの神通力によ

② *Raśmirāja という名称は『如来不可思議秘密説示経』（**Tathāgatācintya-guhyā-nirdeśa*, D No. 47/ T. No. 310(3) / T. No. 312）では西方世界での現在仏として登場する。ちなみに、同経では目犍連が仏の威神力の助けを借りてその仏国土に赴いている（T. No. 310 11.56c20ff; T. No. 312 11.721c16ff）。また、『不思議功德諸仏所護念経』（T. No. 445）でも下方世界の一つとして「明開闢世界、頼毘羅耶如来」（T. 14.363a25-26）という記述が見られる。

19 他本とは異なり、【天】では、他仏国土における菩薩たちと仏たちの問答が本節の前半に見られる。

20 【放】では本節の舍利弗と目犍連の順序が入れ替わっていて、先に目犍連が登場し、次に舍利弗が登場する。

21 藏訳では、【護】をのぞく漢訳諸本同様、三昧の数、仏国土の数とも「万」とする。一方、【護】では、仏国土の数を「万」とし、三昧の方は言及されていない。

って、下方の万の仏国土に赴いても、その鉢の在処あるいは場所も分からずに、彼は再び世尊の前に座った。座ってから〔大目犍連は〕世尊に次のように申し述べた。

「世尊よ、私にはその鉢の在処、あるいは場所も分かりません」

§7 須菩提が三昧に入り、鉢を探す

そこで、世尊は長老須菩提に〔次のように〕おっしゃった。

「須菩提よ、あなたはその鉢を探しなさい」

そこで、長老須菩提は一万二千の三昧に入って、仏の威神力と自らの神通力によって、下方の一万二千の仏国土²⁴に赴いても、その鉢〔の在処、あるいは場所〕分からずに、彼は再び世尊の前に座った。座ってから〔須菩提は〕世尊に次のように申し述べた。

「世尊よ、私にはその鉢の在処、あるいは場所も分かりません」

同様に五百の大声聞たちもそれぞれの神通力（*rddhibāla）と天眼（*devacakṣu）によって、その鉢を探しても見つけられなかった²⁵。

§8 須菩提による弥勒への要請と弥勒による提案

そこで、長老須菩提²⁶は弥勒菩薩に次のように言った。

22 藏訳では三昧、仏国土の数ともに「万」とするが、いずれの漢訳でも三昧、仏国土ともに「八千」となっている。

23 【放】ではこの節では「須菩提」ではなく「摩訶迦葉」となっている。この背景に関しては2つの可能性が考えられる。1つ目の可能性としては、【放】が伝承する過程で、元来は〈阿闍世王経〉同様、「須菩提」であったものが「摩訶迦葉」に入れ替わった、という可能性である。もう1つの可能性は、〈阿闍世王経〉では、第Ⅸ章において、文殊が王舎城に出掛けていく場面で、摩訶迦葉は初めて登場するという設定になっていることと関連している可能性である。すなわち、本経に取り込まれる以前の、【放】と共有する素材・典籍の段階では、この箇所では「摩訶迦葉」であったものが、本経の上記のような第Ⅸ章での設定に合わせるために、ここではあえて「須菩提」に変更された可能性が考えられる。ちなみに【放】では「須菩提」は一度も登場しない。

24 この箇所の三昧と仏国土の数「一万二千」については藏訳、漢訳諸本とも一致する。

25 本節末尾の「五百の大声聞」に関する記述は【放】では確認できない。

26 【放】でのみ「須菩提」ではなく、「舍利弗」が弥勒菩薩に話しかけるかたちをとる。

「弥勒よ、あなたは、無上正等覺にいたるまで一生涯のあいだ隔たったものの（一生補處、*ekajātipratibaddha）として、世尊によって授記されているならば、その鉢はどこにとどまり、どのようにあるのかを探ってください」とそのように〔須菩提が〕言うと、菩薩・大士である弥勒は長老須菩提に次のように言った。

「大徳須菩提よ、私は無上正等覺にいたるまで一生涯のあいだ隔たったものとして、如来によって授記されているけれども、私はそれらの三昧の名も分らない。すなわち、文殊師利法王子はそれらの三昧に入りもし、〔それらの三昧から〕立ち上がりもする。また、大徳須菩提よ、私がさとりを得るとき、文殊師利法王子と同じような菩薩・大士たちは、²⁸『如来がどのように歩みを踏み出し、どのように〔歩みを〕下ろすことをなさるか』と考えて、〔弥勒仏が〕²⁹一步を踏み出しつつ下ろすことも知らない時や場合もあるでしょう。それゆえ、大徳須菩提よ、文殊師利にこそお願いしなさい。そうすれば、彼（＝文殊）はその鉢を探し出して〔地中より〕取り出すことができる」

§9 釈尊による文殊への要請

そこで、世尊に対して上座須菩提は次のように申し述べた。

「世尊よ、文殊師利法王子に何としてもその鉢を探し出し、世尊の御前に差し出すように命じるように申し上げる」

そこで、世尊は文殊師利法王子におっしゃった。

27 【護】ではこのあとに「仁慈恩広、智慧弘達衆所不及、独歩三界而無有侶」と続き、他本にはみられないような弥勒の徳目が列挙される。

28 【識】では「如恒迦沙等悉為文殊師利」（ガンガーの川岸の砂ほどの〔人もしくは菩薩〕がすべて文殊となり）と造り、【護】では「仏、菩薩衆数如江河沙悉為軟首之所開道」（ガンガーの川岸の砂ほどの仏と菩薩はすべて文殊によって道を開かれたものであり）とする。【識】と【護】では「ガンガーの川岸の砂ほどの」という語句のみが共通するが、後続する部分は両訳で対応しない。

29 弥勒が未来に仏になった時のことを述べる記述は、藏訳と【識】【護】には確認できるが、【天】および【放】には確認できない。【放】では「譬如十方恒迦沙仏利満中万物草木及爾所」という文言が見える。

30 前節同様、ここでも【放】でのみ「須菩提」にかわって「舍利弗」が発言する。

「文殊師利よ、その鉢を探しなさい。その鉢がどこにとどまり、どのよう³¹にとどまるのかも把握しなさい」

そこで、文殊師利法王子は次のように考えた。すなわち、

「私は座よりも立たずに、この会座から姿を見せなくすることもないように、その鉢を〔地中より〕取り出す」

と考えた。

§ 10 文殊の右手の行方とその奇蹟

そこで、文殊師利法王子は「遍くいきわたる」³²という三昧に入って、下方の大地に右手を伸ばした。³³そこで、文殊師利法王子のその手は、仏・世尊が現前するところのそれぞれの仏国土において、その手は彼ら仏・世尊に敬礼しつつ進むと、その手から〔それぞれの〕世尊に対して、

「世尊よ、如来・阿羅漢・正等覺者である釈迦牟尼は『御病気はなさっていないのでしょうか。弱ってはおられないのでしょうか。直立されてもおられ

31 【護】では、世尊が文殊に鉢を探してくるようによ請する文言はみられず、代わりに「軟首奉命」という文言がみえる。すなわち、【護】では須菩提の世尊に対するお願いを聞いてすぐに文殊の心中語が出てくる。

32 *kun gyi rjes su song ba*: *Samantānugata 【護】では「軟首三昧名曰普超」（文殊の三昧は名付けて「普超」という）とする。【識】【天】【放】では三昧の固有名は言及されず、【識】と【放】ではその特徴が描かれる。すなわち、【識】では「即時三昧爲無所不遍入」と造り、【放】では「譬如日出光明無所不照，菩薩入三昧者，十方無所不至」とする。また、上記の固有名詞に類する三昧名は『般若経』や **Drumakinnara-rājaparipṛcchā* にも確認できる。拙著〔2012：17〕参照。

33 この箇所と同じく、「文殊が右手を伸ばす」という記述は、下記のように、*Gaṇḍavyūha* で文殊が二度目に登場する場面で見られ、なんらかの関連性を窺わせる。

atha khalu Mañjuśrīḥ kumārabhūto daśottarād yojanaśatāt pāṇīm prasārya sumanāmukhanagarasthitasyaiva Sudhanasya śreṣṭhīdārakasya mūrdhni pratiṣṭhāpya evam āha... (Gv 419.4-6)

「すると、文殊師利法王子は千ヨージュナ向こうから（右）手を伸ばして、まさに、スマヌーカ都城にいるスダナ長者子の頭において、次のように言った」（梶山・丹治訳〔1994：411〕参照。上記翻訳では「（右）手」となっている箇所は漢訳対応部分では「右手」と明示する）

ただし、*Gaṇḍavyūha* では文殊は三昧には入っていない点は本経とは異なる。

ますか。いつも通りですか。力をお持ちですか。安楽を感じておられますか』とおっしゃっております³⁴」

という音声が発せられた。

そこで、手の毛穴 (*romakūpa) すべてから幾百千コーティの光明があらわれて、すべての光明から幾百千ものパドマの花があらわれつつ、そのすべてのパドマの中心には、如来のお身体が座³⁵っておられるのが見える³⁶。それらの如来のお身体すべてでもまた世尊・如来である釈迦牟尼への讃歎を説く³⁷。その〔文殊師利法王子の〕手がそれぞれの仏国土に赴き、それらすべての仏国土も六種に振

34 *snyung ba ma mchis sam/ 'o ma brgyal tam/ bzhengs pa yang ngam/ so bzhin nam/ mthu mnga' 'am/ bde ba la reg par gnas sam zhes gsung ngo zhes zer ba'i sgra phyung ngo//*

この箇所は難解で、訳出し難かったので、いくつかの仏典で共有される、以下に引用するような、定型的な仏・如来への挨拶文を参照して訳出したものの、試みに「いつも通りですか」と訳出してみた *so bzhin nam* のように不明瞭な箇所も残る。

paripṛchaty alpābādhatām alpātāṅkatām laghūthānatām yātrām balaṃ sukhasaṃsarpāśavihatām (SP 429.2-3)

「無病息災でおられるか、生活や体力はどうか、安楽にお暮らしかどうか尋ねておられます」(松濤他訳 [2001: 215])

bhagavato 'lpābādhatām ca paripṛchaty alpātāṅkatām ca laghūthānatām ca yātrām ca balaṃ ca sukhaṃ cānavadyatām ca sparśavihāratām (Vñ Ch. IX §4)

「世尊に病がないかをお尋ねしております。ご不快なく、起き伏しは軽快で、お出かけにもなり、お力がおありで、安楽で、お障りなく、快適にお過ごしでしょうか」(高橋・西野訳 [2011: 170])

ちなみに、本経の漢訳諸本の対応箇所を以下に掲げるが、【護】および【放】では上掲のような挨拶の文言を欠く。

【護】「興処輕利、力勢如常、遊居安耶？」【天】「少病、少惱、起居輕利、安樂行不？」

35 蔵訳では「如来のお身体」とするが、【護】では「菩薩」、【放】では「一菩薩坐皆如文殊」とし、「菩薩」になっている。その他の漢訳では蔵訳同様、「如来」とする。

36 【放】ではこれ以降の神変に関する描写はみられない。

37 この箇所のように、光明とともに蓮華があらわれ、それら蓮華の中に化仏があらわれるという記述は、既に梶山 [1995] でも論じられているように、『根本説一切有部律』や *Divyāvadāna* などの部派文献、および〈大品系般若〉や〈華嚴經〉などの大乘經典とも共有される記述である。

まず、部派典籍でサンスクリット本が現存する *Divyāvadāna* での用例を掲げる。

Nandopanandābhyām nāgarājābhyām bhagavata upanāmitam nirmitam
sahasrapatram śakaṭacakramātram sarvasauvarṇam ratnadaṇḍam padmam/
bhagavāṃś ca padmakarṇikāyām niṣaṇṇaḥ paryaṅkam ābhujya ṛjuṃ kāyaṃ
prañidhāya pratimukhaṃ smṛtim upasthāpya padmasyopari padmaṃ nirmitam /
tatrāpi Bhagavān paryaṅkaniṣaṇṇaḥ/ evaṃ agrataḥ prsthataḥ pārsvataḥ/ evaṃ
Bhagavatā Buddhapiṇḍi nirmitā yāvad Akaniṣṭhabhavanam upādāya Buddhā
Bhagavanto parṣannirmitam / (Divy 162.9-17)

「龍王ナンダとウパナンダとは、葉が千もあり、車輪ほどの大きさで、すべて黄金〔造り〕であり、また宝石の茎を持つ蓮を作って世尊に献上した。すると世尊は、蓮の台に坐って結跏趺坐し、背筋をピンと伸ばして念を面前に定めると、蓮の上に蓮を化作された。そこでも世尊は結跏趺坐して坐られた。同じように、前にも後ろにも〔両〕脇にも。このようにして世尊は、仏の集団を化作し、終には色究竟天に至るまで、諸仏・世尊の衆会を化作されたのである」(平岡 [2007 : 上 284])

これとほぼ同様の表現が『根本説一切有部毘奈耶雜事』(T. No. 1451 24.332b10-c14)にも確認できる。

次に、大乘經典での用例として *Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā* の冒頭にみられるものを掲げる。

atha khalu bhagavāṃś tasyām velāyām jīhvendriyaṃ nirṇamayāmāsa/ yenemaṃ
trisāhasramahāsāhasraṃ lokadhātum jīhvendriyeṇacchādayāmāsa/
trisāhasramahāsāhasraṃ lokadhātum jīhvendriyeṇa sphuritvā tasmā jīhvendriyāt
smitam akarot/ yato 'nekāni rāsmikoṭīniyutaśasahasrāṇi niśceraḥ/ rāsmimukhe
caikaikasminn uttamaratnamayāni suvarṇanirbhāsāni sahasrapatrāṇi padmāny
utpannāny abhūvan/ teṣu ca padmeṣu buddhavigrahā niṣaṇṇaḥ saṃsthitāś
cābhūvan dharmāṃ deśayanto yad uta imāṃ eva śaṭpāramitāpratisaṃyuktāṃ
dharmadeśanām/ te pūrvasyām diśi gaṅgānadibālukupamavyativṛttāsaṃkhyeṣu
lokadhātuṣu gatvā sattvānām dharmāṃ deśayanti sma/ evaṃ dakṣiṇasyām
pāścimāyām uttarasyām adhastād ūrdhvaṃ digvidikṣu/ ekaikasyām ca diśi
daśasu dikṣu gaṅgānadibālukupameṣu aparimāṇeṣu lokadhātuṣu gatvā sattvānām
dharmāṃ deśayanti sma/ yad uta imāṃ eva ca śaṭpāramitāpratisaṃyuktāṃ
dharmadeśanām/ ye ca sattvāś tāṃ dharmadeśanām śṛṇvanti te niyatā bhavanti
anuttarāyām samyaksaṃbodhau/(PvP 7.12-8.4; T. No. 221 8.1b21-28; T. No. 222
8.147c5-10; T. No. 223 8.217b28-c5; T. No. 220 7.2a7-15, 7.428a12-20)

「かくてその時点で世尊は舌根を拡大した(出広長舌相)。その舌根によってこの三千大千世界を覆った。三千大千世界を舌根によって覆って、舌根を挙げて微笑した。その舌根から無数の百千コーティの光明が放たれた。その一つ一つの光の表

面に無上の宝からでき、金色の輝きをもち、千葉（千の花弁）のある諸蓮華が生じていた。それらの蓮華には仏の分身（化仏）たちが坐って、法を説いていた。すなわち、この六波羅蜜と関係のある説法をしていた。かれら「諸化仏」は、東の方角にあるガンガー河の砂の数をも越えた無数の世界にまで行って、衆生たちに法を説いた。このように、南・西・北・上下の方角においても同様であった。さらに十方の一々の方角にあるガンガー河の砂の数ほどの、無量の世界にも行って、衆生たちに法を説いた。すなわち、この六波羅蜜と関係ある説法をした。その説法を聴く衆生たちは無上正等覚に決定したものになった」（梶山 [1995: 258-259]）

また、Otake [2007] でも指摘されているように、『華嚴經』にも類似する神変が説かれる。

『六十華嚴』「賢首菩薩品第八」「若身光明無有量 光明莊嚴難思議 若光莊嚴難思議 則出無量寶蓮華 若出無量寶蓮華 一一華坐無量仏 普現十方無量刹 教化度脱一切衆 若能度脱一切衆 則得無量自在力 若得無量自在力 則能嚴淨諸仏刹」
(T. No. 278 9.434a15-20)

さらに、梶山 [1995] などの先行研究では指摘されていない、いくつかの大乗經典にも類似した表現が確認できる。ここでは〈阿闍世王經〉とも関連が考えられる、DKP § 5F の用例を掲げる。

de nas mi 'am ci'i rgyal po ljon pas byin gyi rlabs ji lta bus me tog de dag lag pa g-yas pas blangs te/ me tog gcig kyang sa la mi ltung ba de lta bu'i byin gyi rlabs kyis byin gyis brlabs nas/ me tog blangs pa de dag bcom ldan 'das la mngon par gtor to// de nas me tog de dag gtor ma thag tu sangs rgyas ky'i mthus skad cig de la stong gi 'jig rten gyi kham me tog rin po che'i gdugs gcig gis khebs par gyur to// me tog rin po che'i gdugs de las mu tig gi rgyan 'phreng bye ba khrag khrig brgya stong phrag rab tu 'phyang ngo// mu tig gi rgyan 'phreng gi mu tig gi 'bru de thams cad las kyang 'od zer bye ba khrag khrig brgya stong phrag du ma byung ngo// od zer thams cad ky'i rtze mo las kyang pad ma sna tsogs blta na sdug pa/ kha dog dag dang ldan pa/ dri dang ldan pa/ yid du 'ong ba dag byung bar gyur to// pad ma thams cad la yang bcom ldan 'das sh'akya thub pa'i sku ci 'dra ba de 'dra ba'i de bzhin gshegs pa'i sku skyil mo krung bcas shing bzhugs par kun tu snang ngo// sangs rgyas bcom ldan 'das de dag thams cad kyis kyang mi 'am ci'i rgyal po ljon pa la legs so zhes bya ba byin te/

skyes bu dam pa khyod kyis sems can mang po yongs su smin par byas so//
「そこで大樹緊那羅王は祝福するかなのようなそれらの華を右肩で受けた。すると一つの華も地には落ちずに、そのように非常に祝福すると、それらの受け取られた花は世尊に対して投げかけられた。そこでそれらの花が投げかけられて間もなく、仏の力によって一瞬の間に虚空界は宝の花からなる傘一つによって覆われた。宝の

動した (*śaḍvikāram prakampitam abhūt)。それらすべての仏国土は大光明によっても満たされた³⁸。それらすべての仏国土は傘蓋 (*chattrā) と幢 (*dvajā)、旗 (*patāka) によっても荘厳された。

§ 11 光明王仏の仏国土への到達する文殊の右手

そこで、文殊師利法王子の右手は、七十二のガンガーの川岸の砂ほどのすべて仏国土を超えると、それらすべての仏・世尊の足に敬礼しつつ、「ご病気は少なくおられるでしょうか」という声を発しながら、彼の世尊・如来である光明王の仏国土たる、遍照世界に入ると、彼の世尊・如来である光明王の足に敬礼して、世尊に対し、

「世尊よ、如来・阿羅漢・正等覺者である釈迦牟尼は、『御病気はなさっていないでしょうか。弱ってはおられませんか。直立されてもおられますか。いつも通りですか。力をお持ちですか。安楽を感じておられますか』とおっしゃっております」³⁹

という音声が発せられた。その手からまた幾百千もの光明が現れた。幾百千も

花からなる傘からは百千無量コーティの真珠の首飾りがぶら下がる。真珠の首飾りの真珠の珠すべてからも百千無量コーティの大量の光明が発せられた。すべての光明の頂からも心地よい種々のパドマがあり、優れた見た目をそなえ、香りをそなえ、心地よいものを発するものであった。すべてのパドマにおいても世尊・釈迦牟尼の身体とまさに同じような如来の身体が結跏趺坐しているのを見た。それら全ての仏・世尊らによっても大樹緊那羅王に対して「よきかな」と言って、

「善男子よ、あなたによって多くの衆生が熟せしめられた」

他には『方等般泥洹経』(T. No. 378 12.923a6-26) や『賢劫経』(T. No. 425 14.10a27-b7) 等にも類似する記述が確認できる。

既に梶山 [1995] で指摘されているように、上記のような記述は部派典籍、大乘經典に共通する記述である。ただし、梶山 [1995] によれば、〈大品系般若〉の後続箇所や本經の後続部分、他の大乘經典で共有される、仏から発せられた光明を受けた衆生たちが何らかの功德を得るという記述や他仏国土の菩薩たちが娑婆世界を見ることを願い、それに他仏国土の仏が応じるとするような記述は大乘特有のものとされる。

38 【識】および【放】においては、この箇所に「光明が仏国土を満たした」という記述に相当するものは確認できない。

39 前々節にみられた各仏国土での挨拶の文言と同じだが、具体的にその内容を説いているのは藏訳のみであり、漢訳諸本では挨拶の言葉は省略されている。注34参照。

のパドマの花が現れた。すなわち、それらの光明は彼ら如来の光明とも混ざら⁴⁰なかつた。

40 本節末尾にみられる、文殊の手から発せられる光明に関する記述は【護】と【放】ではすべて欠けている。一方、【識】では前節冒頭とほぼ同様の記述が再度あらわれ、「パドマの中に菩薩がいる」という点まで描かれる。

表 1 〈阿闍世王経〉第Ⅲ章前半部分 漢訳・藏訳諸本対照表

	T. 626	T. 627	T. 628	T. 629	A	B	Ba	Bth	D	G	Hi	J	L	N	P	Ph	S	T	U
§ 1	392c18	411a9	433a8	449a22		291a8	93b2	61a1	223b1	11a3		247a1	289b6	357b5	233b1	23b2	283b1	263b5	253b3
§ 2	392c22	411a15	433a13	449b6	(50a1)	291b2	93b5	61a3-5, 62a6-	223b3	11a5, 14b10-		247a3	290a1	358a1	233b3	23b5	283b4	263b7	253b5
§ 3	392c25	411a20	433a20	449b9	50a2	291b6	94a2	62b2	223b6	15a3		247a7	290a5	358a6	233b7	24a1	283b7	264a4	254a2
§ 4	392c29	411a27	433a28	449b12-16	50a4	292a2	94a6	62b5	224a1	15a6		247b2	290b2	358b3	234a2	24a6	284a4	264a8	254a6
§ 5	393a7	411b6	433b7	449b18-21	50a9	292a7	94b5	63a1	224a5	15b1		247b7	291a1	359a2	234a7	24b5	284b5	264b6	254b4
§ 6	393a10	411b10	433b14	449b16-18	50a11	292b2	95a2	63a3	224a7	15b4		248a2	291a4	359a6	234b2	25a1	284b6	265a2	254b8
§ 7	395a13	411b15	433b21	449b21	50b2	292b5	95a5	63a6	224b2	15b7-9, 11a5-		248a4	291a8	359b2	234b5	25a5	285a2	265a5	255a3
§ 8	393a17	411b20	433b28	449b24	50b5	293a1	95b2	63a9	224b5	11a7 (91a1-)		248a7	291b4	359b6	234b8	25b1	285a6	265b1	255a8
§ 9	393a24	411c2	433c8	449c1	50b9	293a6	96a1	63b5	225a2	11b1	91a1	248b5	292a3	360a6	235a5	25b7	285b5	265b7	255b6
§ 10	393a27	411c5	433c16	449c6	51a1	293b1	96a5	63b7	225a4	11b4	91a3	248b7	292a6	360b3	235a8	26a3	286a1	266a2	256a2
§ 11	393b6-12	411c17-25	433c26-434a1	449c11-12	51a6-11	293b8-294a5	96b6-97a4	64a4-8	225b2-5	11b10-12a5	91b3-92a2	249a6-b3	292b6-293a4	361a4-b3	235b6-236a3	26b3-27a1	286b1-6	266b2-8	256b1-7